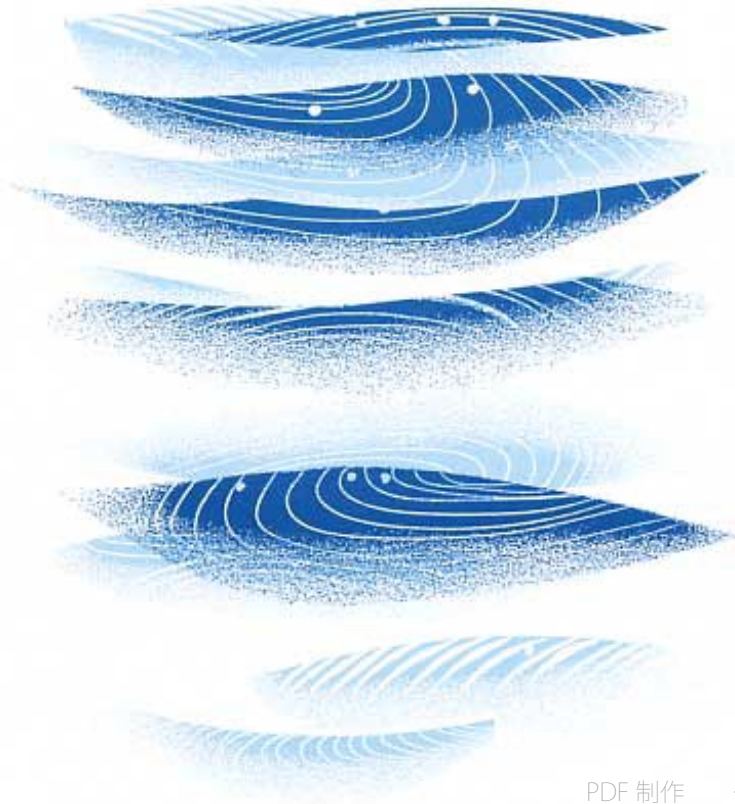


昭和46年2月1日第1種郵便物認可  
平成16年5月1日発行（毎月1回1日発行）  
俳句雑誌 沖 第33巻第5号

俳句雑誌「おき」



5月号



沖  
発行所

PDF 制作

俳誌の salon

# 戻り寒

林 翔

## 春懶く

今月の松本圭司君の作品の中で、  
牧開き駒放たれて風となる

を「真珠抄」に頂いたが、

春の風邪こころ貧しきとき權る  
にも強く惹かれた。私が反省すべき  
事を圭司君に先に詠まれてしまった  
という悔いもある。

あれもしよう、これもしようと張  
り切っていた若き日には寄り付かな  
かった風邪の神が、懶惰な身には取  
り付いてしまう。老齢だからという  
甘えは心の隙、風邪の神の邪剣は、  
そこをねらって切り込んでくる。

「春愁」という季語はあっても、  
「春懶」という季語は無い。「しゅん  
らん」と声に出せば、植物の春蘭と  
間違えられてしまうだろう。

とは言っても、春は懶いのだ。

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

登四郎

は、スポーツマンにさえある春の懶  
さであろう。

足冷えて冷えてこれでも春といふか

ステッキを舗道に鳴らし戻り寒

空は青を梅は紅を吾は何尽くす

鳥翔ちしあと紅椿大揺れに

春の雪かと見上げしが朴一花

指に触れ無精髭てふぬくきもの

春の夜と思へど更けし独り酒

車中作

春青年睡る乙女の髪撫でつ

小沢きく子さん入院手術と聞くに

紅梅白梅咲き揃ひしよ夙く癒えよ

三月十九日、小沢きく子さん永眠

梅は散り君は彼岸のみほとけに

「春愁」の例句の中から「春懶」に近いものを抽いてみよう。先ず、『日本大歳時記』から。

春愁や冷えたる足を打ち重ね

高浜 虚子

春愁や稽古鼓を仮枕

松本たかし

春愁やせんべいを歯にあててみて

大野 林火

春愁の書架乱るるにまかせけり

渡辺千枝子

『沖季語別俳句集』から。

うすうすとわが春愁に飢もあり

能村登四郎

また有るが、紙数が尽きた。

林 翔



# 木落し坂

能村 研三

白い車

流速に倣へる歩み著莪の花

書き込みの本をなぞりて花は葉に

かぎろへる木落し坂の深轍

切り口は修羅をあらはに御柱

茶封筒すげなきものや春暮るる

三月十九日に同人の小沢きく子さんが亡くなった。二月に出先で倒れ入院、手術を行ない一時は快復されたと聞いて安堵していたが、急変して帰らぬ人となってしまった。

小沢さんは沖に入会する前から先師登四郎が指導する平田句会から、そのまま「沖」に参加された方である。

発行所に近いこともあったが、沖のため献身的に手伝っていた。発行所に集った同人投句用紙を林先生の所に車で届け、選句を終えたものを編集部へ、「沖作品」についても、私が選句を終える都度編集部に届けていただいた。この他にも近くの書店に「沖」を委託販売のために届けたり、句会の会場取りを何カ月も前から予約抽選に朝早くから並んでいた。また勉強会などの大会では句集などを含めた販売の仕事を自らの車で運びながらやってくださ

坂本京子句集『虹の根』

虹の根を同じうしたる直の距離

大柿春野句集『日向水』

春の野に明治の氣骨在すかな

宮坂恒子句集『雪底』

八ツ嶺の雪解うながす鐘の音

探梅の己を探す一日かなの句あり

杉本光祥句集『山開』

朧夜に己探しの句業かな

川村杏平句集『羽音』

啄木の山野に鷹の羽音かな

山本かず句集『水明り』

前向きな余生に春の水明り

遠藤とく句集『草ひばり』

とくさんが乗り継いで来る雪間かな

深野敦子句集『グリオネの羽』

纏へるはポルシェの赤の花衣

清水美代子句集『日照雨』

春興や貰ひ煙草に火を灯す

望月晴美句集『要滝』

ほとばしる雪解水こそ要滝

った。

先師登四郎が元氣だったころは句会場まで車で送迎してくれたり、地方に出かけるときも家に迎えにきていただいた。

あの小沢さん専用の白い車は今ごろどうなっているだろう。主を失ってどこかの駐車場で静かに休んでいるのではないか。

自分のことは二の次にして、ころよく手伝ってくれた小沢さんと、あの白い車に心よりお礼を申し上げます。

\*

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

能村研三



# 蒼茫集



## 牡丹雪

北川英子

誰訪ふでなく産土の春の畦  
結ひ上げし髪のかくらみ牡丹雪  
堰やつと跳んですぐ堰上り鮎  
風船つけ浮き上りさう乳母車  
胡沙降るや地球のどこかきな臭き  
春愁や潮引きし砂踏めば鳴き

## 墓の貌

河口仁志

昨夜生れし仔馬が歩く下萌ゆる  
いづこよりさまよひ来たる墓の貌  
闇を跳ぶ一瞬恋の猫となる  
反故焚くや雨まじりなる春の雪  
初蝶の一瑕なき翹刻過ぎゆく  
菊根分終へし夕べの寡黙なる

## 牧開き

松本圭司

牧開き駒放たれて風となる  
裏山の淋しいところ梅ひらく  
流し雛やさしい波に託しけり  
合掌をしづかにほどき辛夷咲く  
わが知恵のごとく鮑の肝苦し  
春の風邪こころ貧しきとき罹る

## 江の島

金子孝子

子がくれし楽しき数の雛あられ  
囀りや樹はふつくらと赤み持ち  
ふらここに自在ごころの戻りたる  
春山を裏からといふ旅の計  
この先も自適を通す墓  
江の島は青春の墓碑草萌ゆる

# 潮鳴集



うねり 林 玲子

流水の胴の青透くうねりかな  
瞬時に氷る甲板の波しぶき  
去りがたし樹頭の鷹の視線より  
真つ黒なミニスカートよ雪の鶴  
眩しめば雪解雫のさんざめく

土筆摘 坂本京子

遠き日の吾と語りつ土筆摘  
鳥雲に遥けきものをいまだ追ひ  
張り交す細枝あかり梅二月  
禍の多き世の隅いぬふぐり  
紅梅や思はぬ雨に紅涙を

眩き 中島あきら

露の臺地に眩きのあるごとく  
風光る空翔ぶものの声を撒き

草萌や仏刻みし石の屑  
倒木の空に遊べる木の芽かな  
雲雀落つ天の鍵穴見失ひ

土竜塚 清水公治

春浅し湯気立ててゐる土竜塚  
耳たぶに朝日のなごみ春隣  
凍滝にハーケンの音跳ね返る  
耕人につつがの癒えし声の張り  
陽炎をおもしろおもしろと列車来る

ひらがな 横山淑子

ひらがなを生みし国なり白蝶来  
探しものはじめはいつも春炬燵  
おほかたは父の息なりしやぼん玉  
亀鳴いて枕にならぬ電子辞書  
三寒やどこにも合はぬ鍵がでて

# 沖作品



## 能村研三選

松明けの空存分に一つ星

茨木

今瀬 一博

寒星を射ぬくわが眼の澄みにけり

霧ひきしごとく朝寝の夢忘る

球児らの個性でこぼこ露の臺

風音をつつむせせらぎ桃の花

春なれやさざなみさへもなつかしき

水音をはぐくむ笹生ひなまつり

春寒料峭嘴刺して水にこらざる

杣の子の棒切に春立ちにけり

子のものを干して飯場や鳥帰る

もそもそと次男の寝起き花豌豆

初花や手のきれさうな師の句集

鍬洗ふ水に温みのありにけり

辛夷の芽雲がぐづぐづしてをりぬ

おもひきり捨てて春愁紛らはす

残雪の嶺よりの水青みけり

長野

内山恵美子

東京

坂 ようこ

栃木

熊倉 志津

雪滲みして連山の水墨画

すべて雪空白の間にゐることし

この辺りかつて海底雪野原

やまなみや汽水豊かに舳挿して

林檎咲く夜空を星と頷ち合ひ

蛇穴を出て薬師寺のにはたづみ

笈摺のちらほら花菜明りかな

切つ先に朝光凜と御神渡

早春の瀬や宿木の毬みどり

古時計脳裏に聞いて朝寝かな

御柱祭の綱打ち上がる春の雨

陽のあたる薄氷程のわだかまり

鶴千羽折らむ余寒の灯を入れて

受験子の親には見せぬ強さあり

春愁の息を留める喉仏

春一番聞けども遙か北暮し

北海道

頼田 幸子

東京

福嶋千代子

長野

矢崎すみ子

愛知

三好 智子



子が飾る雛の間ひそと見守りぬ  
囀や身を乗り出して朝日浴ぶ  
ひとつづつ目を合はせては雛納む  
雪吊に風肅々と潮明り  
不揃ひの枯蘆さばく水馴れ棹  
小康の母と春野に身を解く  
婚の使者迎ふ雛の灯をともし  
少し濡れて慈愛と思ふ春の雪  
鴨川に春ひろひろと光り合ふ  
馬酔木咲く心の鈴も鳴らしたし  
花時雨がらんだうなる楽器屋に  
すかんぽを囁めば疎開の味のせり  
麦踏み足裏のすべて肉付きぬ  
採血に春望の色濃かりけり  
内視鏡胸の辺りの目貼はぐ  
膝寄せ給ふさまに納めぬ内裏雛  
雛納め牛車も駕籠も手のひらに  
切株の痕累々と雪解風  
雪解雫一つづつ日の粒となり  
白湯味はふ膝に冬至の影受けて  
藪椿ほつほつ安房の磯明かり  
初音してタオルに嬰をもらひけり  
京菓子の紅はんなりと春かもす  
塩場寺と呼ばれて久し冬萌ゆる  
海光や嘴争ひの夕千鳥

愛知

近藤 敏子

京都

子安 教子

東京

齊藤 實

北海道

梶川智恵子

千葉

廣島 泰三

佐々木よし子

店先の古書に日あたる春隣  
船笛の尾を引く響み二月尽  
木枯の不機嫌なだめやうもなし  
待ち針の彩のやはらぐ針供養  
一心の瞳そそがれ流し雛  
大試験うなづき返し送り出す  
たかだかと猫は尾を上ぐ春障子  
雪吊の解かれし木々の落着かず  
豆撒きのさなか菓缶の湯が沸けり  
家中の灯を消さずおく追儼あと

大阪

吉武 千束

長野

澁澤志げ子

## 新人賞予選句（五月）

寒星を射ぬくわが眼の澄みにけり  
水音をはぐくむ笹生ひなまつり  
おもひきり捨てて春愁紛らはす  
すべて雪空白の間にゐるごとし  
林檎咲く夜空を星と傾ち合ひ  
切つ先に朝光凜と御神渡  
陽のあたる薄水程のわだかまり  
ひとつづつ目を合はせては雛納む  
不揃ひの枯蘆さばく水馴れ棹  
少し濡れて慈愛と思ふ春の雪

今瀬 一博

坂 ようこ

熊倉 志津

内山恵美子

福嶋千代子

矢崎すみ子

三好 智子

頼田 幸子

近藤 敏子

子安 教子

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

水音をはぐくむ笹生ひなまつり 坂 ようこ

この句二句一章の句として季語の斡旋の仕方がうまいと思つた。早春の頃、「水音を育む笹生」というから山奥の笹の生い茂つた水源が近い所であろうか。こんな所は、大古の昔から現在に至るまで殆ど変わることなく日本の古代の原風景を今に伝えている。それに二句一章の句として「ひなまつり」という季語の配合に意外性がある。「水音を育む」ということは、山の雪解けも始まり、水に流れが生れて春が動き出すことである。「ひなまつり」はその原型は中国の古風俗にあって早春に水辺に出て災厄を払う行事であつたというから、まんざら関係なくもない。

おもひきり捨てて春愁紛らはす 熊倉 志津

マンネリ化した日常習慣を断ち切るには、少し勇気が必要になる。日常を思い切り切りふち壊してみることも必要で、心機一転新たな生活環境がそこに生れる。人間が生活をして行くには、本当は最低限のものがあればよい筈なのに、捨てるには惜しいとか、愛着の気持が増すと中々ものが捨てられなくなる。そんなうちに自分の身の回りには、いつしか今の生活に直接使わないうものが増えてきて身動きが出来なくなるのだ。一つ一つのものには思い出があるが、その思いを春愁と一緒に捨てて新しい気分になつて出発することにしたのだ。(以下略)

寒星を射ぬくわが眼の澄みにけり 今瀬 一博

凍てついた夜空は大気が澄んでいるが、無限の宇宙の中で輝く星空としばし対峙したのであろうか。この作者の気持は純粹でまた真剣である。体は芯から冷えてくるものの、荒涼さの中に一段と鮮やかに光り輝く星座を見ていると何か生きる力といったものを授かるような気持が湧きおこってくる。今見えている星は何万年という昔に発した光だが、一瞬一瞬を照らしだしながら、生きるための力を神様から授かつているようだ。「眼光、人を射る」という言葉があるが、これは鋭くものを観察するときなどにも使われるが、寒星をじつと見ているうちにわが眼まで澄んできて、心が洗われるような思いになったのだ。もう一句「球児らの個性でこぼこ露の臺」の句も、高校野球の球児らを監督する教師としての実感がある句でおもしろかった。